

〈実践報告〉

遠距離にいる教育実習生への事前事後指導の実際

大 矢 一 人（藤女子大学 文学部 文化総合学科）

本論文は、本学より離れた地域に在住し、科目等履修生として実家近くの札幌市内の高等学校へ教育実習に行く卒業生（Sとする）に対して、教育実習の事前事後指導をどのように行ったのかを具体的に分析するものである。それらは、以下の3点にまとめられる。

第一に、Sへの指導は、メールのやりとりが51件、指導案の添削が6件、録画送付にコメントを行ったものが5件、目の前で模擬授業指導が1件というものであった。またそれ以外に教務課との事務的なやりとりなどを郵送によって行った。第二に、これらの指導について筆者は、事前事後指導に関する実務的および実際的な内容について、一定程度の成果があったと判断した。もちろんプリントなどを読んでいれば分かると考えていたことについてもメールでの問い合わせがあるなど若干の課題はあるが、直接指導できない中である程度の指導はできた、と判断した。教育実習校側の評価も高かったからである。しかし、第三にSは、いくつかの問題点を提示した。それは、スカイプなどを使用したリアルタイムでの指導、家庭科に関する内容によるさらに深い指導（筆者の専門が教育学であることの問題）、そして他の実習生の模擬授業を見学するなどの「仲間」との学習である。

以上、実務的な指導はともかく、実際的な指導については直接会って指導をする大事さが明らかになった。それでも遠距離での指導が必要な場合には、リアルタイムでの指導や、より専門性の高い「仲間」との学習を少しでも取り入れることが大事であることが判明した。

キーワード：教育実習事前事後指導、遠距離にいる実習生、ICTの活用

はじめに

本論は、本学より離れた地域に在住し、科目等履修生として実家近くの札幌市内の高校へ教育実習に行くSに対して、事前事後指導をどのように行ったかを、具体的に報告するものである。教育実習までの事務的な内容まで含んで実践報告するのは、そのような報告があまりなく、具体的な指導をよりリアルに報告することに意味があると考えたからである^{1)~3)}。

「教育実習事前事後指導」は、平成元年の教育職員免許法改正⁴⁾によって、1単位として単位化された。それより以前から教育実習へ行く学生に対して事前指導を行う大学は数多くあったと思われるが、文部科学省があえて単位化したのには、学生に対して十分な準備

を行った上で教育実習に向かわせたいという意図があったからと思われる。

本学ではその時点から、教育実習事前事後指導として、「教育実習Ia・b」を3年前後期に配置しており（のちに、3年後期・4年前期へ^{脚注1)}）、その単位数は各30時間である。すなわち、1単位=15時間ですむところをその4倍で配置し、充実した事前事後指導を行っているわけである。

しかしSの場合は、この「講義」としての教育実習事前事後指導を受けずに教育実習に行くことになった。詳細は以下に述べることになるが、Sは、すでに高等学校免許を本学で取得して卒業し、今回、中学校免許を取得するために教育実習に行くことになった者であり、現在、本学から遠距離の京都市に住んでい

1) 4年後期に配置されるべきとされる「教職実践演習」が設置されたときに学年配当を変更し、3年後期から4年後期までに連続性をもたせるようにした。

る。よって、毎週「教育実習 I a・b」を履修することは実質不可能である。また S は、高校免許取得のために在学中にすでに「教育実習 I a・b」を履修しており、中学校免許取得のためにもう一度履修する必要はない。

しかし教育実習に行く前にその準備として事前事後指導を受けておくことは大切である。そのため、単位としてではなく、実質的な準備として、教育実習の事前事後指導を行うことになった。

本論では、まず「1」において、S が中学校免許を取得しようと考えた背景から、実習校確保までの流れを確認する。そのうえで、「2」において、具体的な教育実習事前指導の内容を報告する。その指導方法はおもにインターネットを用いるというものである。「3」において、教育実習の実際をおさえるとともに、実習中の指導、さらに事後の指導を報告する。

1. 教育実習を行うことになった経緯と実習校確保、事務的な流れ

(1) 実習生 S の実習志望動機

S は、2001 年度に人間生活学部人間生活学科に入学し、2005 年 3 月に卒業したが、翌年科目等履修生として母校の札幌市立の高等学校で実習を行い、高等学校第一種免許状（家庭）を取得した者である。その後教員には就かずに過ごし、現在は夫と子ども 1 人とともに、京都市に在住している。

S が筆者に連絡をしてきたのは、2015 年 10 月 16 日である。すでに人間生活学部の事務局には連絡を入れていたようで、筆者の方へ事務局から連絡があり、筆者は、今回なぜ中学校免許を取得したいと考えるようになったのか、実習校をどのように確保するつもりかなどを問い合わせた。S は、「なぜ免許科目を追加したいと思ったかという点」について次のような理由をあげた。

- ・教育実習に行ってから全く関係のない仕事に就いてきたものの、なかなか教員の仕事に対する気持ちに諦めがついていないこと。
- ・京都で生活を始めて 6 年経つが、その間にやっと自分自身に少し自信を取り戻したこと。
- ・来年までに高校の教員免許の更新手続きが必要であるが、京都で高校の教科のみ教える講師でもと思っても求人自体がほとんどない。中学であれば京都市の採用試験も 50 歳までで年間何人かの求人はある。私立も講師の募集はあるが、中高一貫が多いため、中学の免許がないと

難しい。大阪や滋賀も通勤圏内の場所はあるが、公立であれば高校の採用はほとんどなく、中学のほうが採用枠は広く、私立は京都同様中高一貫が多いため、中高両方の免許が必要であること。

- ・それで、来年までに高校の免許の更新講習を受けるよりも、教育実習に行つて中学の免許を新たに取得して、高校の免許も一緒に手続きするほうがいいのではということになり、元々中学の免許も取るつもりで大学に通っていたので、介護等体験、体育の授業は受けていたこと。

S は「夫ならびに両親に相談し、子どものこと、経済的なことと、実習期間に家をあけることなどをよく話し合い、周りは行ってきたらいいと背中を押してくれたもののなかなかふんざりがつかず」にいたという。

しかしこの度、「高校生の時と教育実習の時にお世話になった先生」が、たまたま京都にこられて「色々話をし、今だったら何とかなるだろうから行ってきたらと背中を押していただいて、やはり教育実習を受けて中学の免許を取得し、教科のみの講師でもいいから仕事としてできたら」と思ったということであった。

さらに、実習校についても「その先生は札幌に帰り、週末に現在〇〇高校（S の母校）で家庭科を教えているから、実習の件は伝えてくださるということ、本来は春に来年の教育実習のお願いの連絡をして、教育実習に行くという流れだが、もしかしたらまだ 10 月なので、お願い次第で来年に実習受け入れ可能かもしれないから、一度週明けに〇〇高校に実習のお願いの連絡を入れてみたら、とおっしゃってくださった」ということであった。

(2) 実習年度の確定

筆者はすぐに返信をした。以下のような内容である。

メール拝受しました。事情がわかりました。実習校が確保できるというのであれば、事前事後指導は個別に行うということで、本学の科目等履修生として実習に行くことを許可します。以下に事務的なことを含めて、今後のことを記します。

①内諾

来年度に実習を行う場合、早急に内諾書をもらう必要があります。そのため、もし実習が来年度の実習が可能であるならば、一度内諾書をもって実習校にあいさつに行く必要があります。内諾書

は郵送もできますが、できれば書き方などを説明したいので、実習校に伺う前に一度大学に来て、北16条キャンパス教務課教育実習担当のKさんからもらって下さい。私が見える時間であれば、私も会います。もし、内諾のあいさつに来なくてもよいと言われても、内諾書は必ず実習校に送ることになります。もし、再来年度の実習になった場合には、再来年度用の内諾書は2016年2月に学生に配布する予定です。

②科目等履修生申し込み

来年度に実習を行う場合、「教育実習Ⅲ」の科目を履修する申し込みを所定の時期にする必要があります。2016年3月だと思いますので、①に関してKさんに連絡をする場合に、そのことも聞いて下さい。また、科目等履修生としての費用以外に「教育実習費」も必要となります。

③事前指導

もし来年度に実習に行くのであれば、〇〇高校の実習は5月だと思いますので、時間がありません。教科書(〇〇高校用)と『高等学校学習指導要領解説 家庭科編』⁵⁾、そして『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【高等学校 共通教科「家庭」】⁶⁾を購入して下さい。教科書以外はHPでも見ることはできますが、購入した方がよいでしょう。

④指導案作成

上記のものをふまえて、家庭科のどの部分でもよいので、一つの単元の「単元計画」とそのうちの一時間分の指導案を作成して下さい。今の新しい指導案様式では、今の時点では無理だと思いますので、昔の形でよいです。様式などを私が送ってもよいのですが、実家にあるもので確認するなり、HPなどで調べてみてください。それが勉強になると思います。

とりあえず、以上です。

まずは「一度週明けに、〇〇高校に実習のお願いの連絡を入れてみる」という活動をしてください。恩師の先生もおっしゃっているとおり、通常であれば来年度のお願いには遅い時期ですので、丁寧な対応が必要です。

実習を来年度か再来年度かのどちらで行うのかを決めることがまず大事です。その対応は、こちらでお願いします。

大学側および筆者がこの時点で重視していたのは、実習校確保と実習年度の確定であった。本学の場合、実習校確保はまずは実習生の自己開拓により行ってい

る。実質的には母校へのお願いである。しかしSの場合、すでに2005年度に一度実習を行っており、再度の実習を行うことが可能なかが問題であった。恩師の示唆もあり、母校での実習が可能となったことはSにとって、非常によかった。一方で実習年度については、Sは準備期間が必要なため、再来年がよいと考えていたようで、大学側でもブランクのある中、準備をどれだけすることが可能かと考えていた。そしてSからは、10月18日に実習校への連絡についてのメールが入った。次のようなものである。

早速ですが、母校の〇〇高校に連絡を入れたところ、来年度の実習の受付は7月末で終了していること、来年度の受付人数が10名を超えており、追加で受け付けるのは難しいということで、来年申し込み、再来年の実習となりそうです。

教科書については来年度の使用が決定しているものを聞いておきましたので、それをO先生(筆者のこと…筆者注)が教えてくださった他の必要な学習指導要領などと一緒に入手しておきます。指導案については、教科書などが届いて、熟読してから作成していきたいと思います。

再来年で少し時間があるので正直なところ少し助かっていますが、間がある分、できるだけ準備はしておきたいので、ご迷惑もお手数もおかけしますが、ご指導いただけたらと思います。どうぞよろしくお願い致します。

筆者は、事前指導としての準備について(たとえば11月までに、単元計画とそのうちの一時間分の指導案を作成する)の提案と、事務的な「来年申し込み、再来年の実習」のための準備(2月中旬までに内諾書が完成し、それをそちらに郵送すること)の連絡をし、Sからは、翌日の19日に「了解」のメールが入った。

(3) 事務的手続きの流れ(実習内諾書の送付および実習調査書の作成など)

指導案作成などの事前指導については、「2」で述べることにし、ここでは、その後の事務的作業についての流れを述べる。

まず本学の教育実習担当であるKさんとSは、2015年度内に連絡を行い、①2017年度に実習を行うこと、②科目等履修生申し込みの方法、③その後のこと、などを話し合った。①②に関してSはすでに高校免許取得のため、本学の「教育実習Ⅰa・b」(各1単位)と「教育実習Ⅱ」(2単位)を修得済みである。そのため、「教育実習Ⅲ」(2単位)を履修することとし

た。また、科目等履修の申し込みは、本来ならば家庭科免許に関する事項であるので人間生活学部で受け付けをするのであるが、今回の場合は、筆者が文学部に所属していて個別指導をするため、文学部での受け付けとした。③については、2017 年度用の教育実習内諾書がで次第、S 宛に「教育実習内諾の方法」という文書とともに送付することとした。

4 月 1 日は〇〇高校の実習内諾受付日であり、S は実習内諾のために電話をした。担当者（教務担当の先生）が今年度からの新しい先生だったため、まだ十分に手続き内容を把握しておらず、後日電話連絡くれるということになった。4 月 15 日に、〇〇高校から S に連絡が入った。週明けに「教育実習申し込み書」を添付してメールを送るので、「申し込み書」をメールにて返信し、その後、内諾書を郵送するという事になった。なお、実習時期はおそらく GW 明けになるということであった。その後、4 月末までに申込書をメールに添付という形で送付した。7 月末まで受け付けをし、8 月から内諾書の送付という流れである。実習を受け持ってくださいの予定の〇〇高校の家庭科の K 先生とも、一度電話で話をした。

8 月中旬、大学に〇〇高校から連絡が入った。教務課の K さんによれば、教育実習内諾書を S の自宅に送ったということであった。K さんは S に電話連絡をし、内諾書が自宅に届き次第、コピーを大学に送付するように指示した。またこの時期、S が卒業後に新たに履修する必要ができた「教職実践演習」という科目について、S が履修する必要があるかどうかを確認した。教務課の調べで、S は在学中に「総合演習」を修得済みであり、履修は必要なしということが明らかとなった^{脚注2)}。12 月下旬に教務課の K さんは、S に以下のような教育実習関係の書類を送付した。

あ)『教育実習日誌』⁷⁾ い)『教育実習の手引き』⁸⁾ う)「教育実習日誌の書き方」 え)教育実習生調査書（本物、A3）^{脚注3)} お)教育実習生調査の記入の仕方 か)教育実習生の調査書下書き（B4） き)「住まいの危険をみつけよう！」(小学生向け新聞記事←筆者提供)

教育実習生調査書関係が中心である。まず、お)を

みながらか)の下書きを作成し、筆者までメール（PDF 提出）でチェックを受ける、そのうえでお)の本物に記入し、シャチハタ以外の印鑑を氏名の横に押して、2017 年 2 月下旬ごろまでに教務課に提出するという指示であった。なお、あ) い) は学術図書出版発行で、道内私立大学の多くで使用されているものである³⁾。う) は、4 年生対象の 4 月の通常の実習事前指導の講義でも使用している。

調査書については、2 月 15 日に電話連絡をして、訂正内容を説明した。PDF ファイルで朱をいれたものを送ったが、説明不足になると考えたからである。電話連絡をするための確認はメールによって行った（2 月 8 日、14 日）。

(4) 実習校訪問

3 月下旬、S は実習校訪問と、下記にみる筆者の前での模擬授業を行うため、北海道にきた。というのは、1 月に実習校へ連絡をしたところ「実習生は春休み中に実習担当する授業の相談に学校に伺う方が多い」ということを聞いたからである。また、このときに実習時期は 5 月 8 日からの二週間、オリエンテーションは 5 月 2 日、実習時の指導内容はおよそ、保育の単元の可能性が高いことが判明した。S は筆者に、①高校に連絡しなければいけないこと、②高校に実習期間、オリエンテーションを除いて訪問すべきことや時期、などについて質問をした。1 月 18 日付けのメールでの筆者の回答は以下の通りである。

①については、調査書を実習校に 4 月 1 日に送ります。あとは、あなたがもし 3 月 27 日に実習校の先生と会うのであれば、その時に指示があると思います。

②については「訪問すべきこと」という意味がよくわかりません。まず、〇〇高校は春休みに伺うのが普通ということですが、その他の実習校がそうではありません。各学校によります。訪問した際にお聞きすることはいろいろとありますが、春休みのほうは、あくまで授業内容についてだと思っていますので、伺って話を聞いて下さい。

5 月 2 日のオリエンテーションは、おそらくプリントが用意されていて、いろいろと事務的なこ

2)「教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令（平成 20 年文部科学省令第 34 号）」（平成 20 年 11 月 12 日）の付則第 3 条に、「平成 25 年 3 月 31 日までに、旧規則第 6 条の表第 5 欄、第 10 条の表第 5 欄又は第 10 条の 4 の表第 5 欄に規定する総合演習の単位を修得した者は、教職実践演習の単位を修得することを要しないこと（ただし、平成 22 年度以降の新入生は除く。）。」とある。

3) なお、調査書には評価表が付いており、2017 年度より 4 段階評価から 5 段階評価へと評価方法が変更となった。1 月 16 日付けの K さんからのメールで、新しい調査書を送付することとなった。

とが話されます。もし、過去の実習日誌をお持ちでしたら、それを読み直すとよいでしょう。日誌の書き方や訪問の際に聞いた方がよいことについては、プリントがありますので、26日にお渡しします。それよりも前のほうが良ければ、おっしゃって下さい。

Sのメールによれば、3月27日に行われた実際の学校訪問は以下のようなものであった。

高校に訪問して質問してきたことは以下の通りです。

・学校要覧について

実習初日のオリエンテーションにいただけるそうです。実習日誌の学校環境は初日に記入するので大丈夫なのでしょうか。それとも、インターネットなどで調べて事前記入の方が良いでしょうか。

・指導案の様式について

実習日誌の様式そのままが良いそうです。〇〇高校独自の様式はないそうです。

・具体的な内容

1年生対象の保育の内容で4～5時間分の授業を考えてくること。そのうち1時間は研究授業(3時間目くらいのところ)となる。また3年生対象の調理実習の内容を2つ考えてくること。

私が実習に入る前は、家族に関すること、民法などの部分とのことでした。調理実習は2日に分けて(連続した2日)、1時間は説明や下処理、2時間目は調理、試食、片付けと実施することになりそうだということでした。

実習期間が2週間しかないの(しかも予定表を見せていただいたところ、15日は開校記念日で休み、二週目から高体連のためもしかしたら午前とか短縮授業の可能性が高いとのこと)、実習の2、3日目くらいから授業をやるようにとのことでした。保育に関して、実習生としては私自身がおそらく特殊だと思うので、少しは実体験をもとに話もできるかなと考えていたのですが、家庭環境が複雑な生徒も少なくないこと、先生の中でもさまざまな治療をされている方もいる(予想はしていましたが、現実としておられるということで、デリケートな部分の話でもある)ため、どう授業を展開していったら良いかなと悩んで帰ってきました。生徒には、今後家庭を持ち、子どもを育てることに希望を持つような、将来を楽しみにできるような考えに至る授業にしたいのですが。

調理実習の方も、去年は選択した生徒が17名程度だったところ、今年は42名と多いとのこと、バタバタするかもという話でした。

また、担当教諭からは、自由に、やりたいようにやってみてと言われたのですが、余計私としては心配になって帰ってきました。過去の実習生の話も聞けたのですが、指導案ももう少しこうしたら? という話はあまりないのかとも思いました。実習中は大いに失敗してくださいという意味なのでしょうが、年齢のせい、大きな失敗は怖いですね。まずは、指導案作りを頑張ります。

筆者が予想したとおり、実習の内容についてある程度深い話となっている。実習まであと1か月の時点で、しっかりと準備をしてきてもらいたいという指導教諭の考えが見えるようである。

また、実習日誌の書き方についてSが筆者に質問をしてきた。「黒のボールペンで清書をするのか、シャープペンなど消せるもので記入してよいのか」という点である。筆者は3月30日に以下のようなメールを送った。

実習日誌は、原則、ボールペンで記します。下書きをして「清書する」時間はないと思います。「観察の記録」も含めて直接書ける練習が大切です。ただし、指導案については「書き直せ」と言われる場合があるので、実習校の先生の許可がおりれば、鉛筆書きとなります。

さらに、3月末に「教育実習をするにあたり」という題目の作文を作成するようにとの指示が実習校側からあった。Sは4月29日に、「だ、である」調、もしくは「です、ます」調のどちらで書けばよいのかという質問をしてきたので、筆者は前者である旨のメールを翌日の4月30日に送った。

話は前後するが、科目等履修生申し込みの書類は、Sのところへ3月15日に届き、21日までに返送された。お金については、北海道に来たときに、筆者が科目等履修生受講料と教育実習費を受け取り、それを大学側に渡した。

さらに、3月末には、大学側による実習校訪問の教員をお願いするため、Sのゼミ担当であったI先生にメールをお願いをした。I先生は快くお引き受け下さった。

2. 事前事後指導の実際

(1) 指導の概要

以上の教育実習内諾や調査書送付・学校訪問などの事務的な活動をふまえて、具体的な事前事後指導の実

際を見てみたい。指導の多くはメールによるやりとりであり、さらに模擬授業も、指導案と授業を録画したものを私が見て、コメントをメールで送るという形であり、実際に目の前で行ったのは一度きりであった。

表1は、メールなどのやりとりをまとめたものであ

表1 事前指導のメールなどのやりとり

年月日	Sからのメール	筆者からのメール
2015, 11, 29	指導案（①子どもの食事）送付	指導案①についての質問
11, 29		指導案①についてのコメントと質問
12, 12		
12, 15	指導案①についての質問への回答	
12, 20	指導案①の修正とDVDの送付	
12, 24		指導案①のコメントの確認
2016, 2, 1	指導案①に基づく模擬授業DVDの送付	
2, 10		USB及びお菓子の到着
2, 13		指導案①による模擬授業へのコメント
2, 13	指導案①のコメントへのリプライ	
3, 5	指導案②（被服の組成表示）送付	
4, 1		指導案②の拝受
4, 12		指導案②ならびに指導案②による模擬授業へのコメント
4, 16	指導案②のコメントへリプライ	
4, 19		指導案②のリプライへの返答
4, 30	指導案②の修正版送付	
5, 5		指導案②修正版へのコメント
5, 13	指導案②修正版へのコメントのリプライ	
5, 13		リプライ拝受
8, 22	PCの破損と2種の指導案送付のお願い	
8, 23		指導案送付延期の了解
8, 29	指導案送付期限の設定	
8, 30		指導案送付期限の確認
11, 13	指導案③（職業生活を設計する）及び指導案④（安全で快適な住生活）の送付	
11, 14		指導案拝受と腰痛
11, 14	腰痛への気遣いと動画の件	
11, 14		動画の件
11, 20		指導案③動画の不調と指導案④による指導案・模擬授業へのコメント
11, 27	指導案③の動画の再送付と目の病気	
11, 27		動画の拝受
11, 27	指導案③の動画の再送付（その2）	
12, 13		ダウンロードの状況
12, 14	指導案③の動画の再送付（その3）と来札	
12, 14		札幌での模擬授業
12, 14	指導案③の模擬授業実施	
		来学の方法
12, 14	事務的手続き	
12, 24		帰省とお子さんの加減
12, 25	帰省	
12, 27		インフルエンザと動画
2017, 1, 15	指導案③の動画の再送付（その4）と指導案④のコメントへのリプライ	
1, 16		指導案④及び指導案④による模擬授業へのコメント
1, 16		添付し忘れ
1, 18		指導案④へのさらなるコメント
1, 20		指導案③についての追加コメント
2, 5	指導案③の模擬授業へのコメントのリプライ及び実習生調査書について	
2, 7		3月26日の模擬授業の実施について
3, 16	指導案⑤（誰と食べる？ どう食べる？）の送付予定	
3, 20	指導案⑤（誰と食べる？ どう食べる？）の送付	
3, 22		指導案⑤の拝受
3, 22	指導案⑤（誰と食べる？ どう食べる？）の再送付	
3, 23		模擬授業の確認
3, 24		来学の方法
3, 26	指導案⑥（子どもの育つ力を考える）による実際の模擬授業	

る。上述したように、2015 年 10 月に実習申し込みのメールが届き、第一弾の指導案作成を 11 月下旬までに依頼した。そこから、目の前で模擬授業を行った 3 月 26 日までのメールなどを掲げている。メール数は 51 件であり、指導案および模擬授業についての指導は、動画によるものが 5 回、目の前で行わせたものが 1 回 (2017 年 3 月) となっている。動画については、最初は DVD を郵送してもらっていたが、その後は動画ソフトをメールで送る形にした。

S は事前指導中に北海道に二度来たが、一度目 (2016

年 12 月) は子どもの具合が悪くなり、急遽実家に戻ったため、筆者とは会うことはできなかった。筆者の腰痛や S の目の病気、さらに PC の破損といった不意の出来事で、指導が滞ったこともあった。

(2) 最初の指導案の内容と模擬授業の様子

それでは、具体的な指導の実例をみてみる。最初に指導案がメールで送られてきたのは、2015 年 11 月 29 日であった (資料 1)。

この指導案は久しぶりに書いたものにしては、ある

資料 1 最初の指導案

第〇学年家庭科学習指導案

指導者 ○○ ○○
指導教諭 ○○○○

1. 日時 平成 年 月 日 (曜) 第 校時 (: ~ :)
2. 学年・組 第 学年 組 計 名
3. 場所 第 学年 組 教室
4. 単元名 子どもと共に育つ
5. 単元の目標

子どもの発達と生活、子どもの福祉などについて関心を持ち、家族の役割と保育の重要性や社会の果たす役割について認識するとともに、子どもを取り巻く環境や子育てにおける課題について考え、子どもを生み育てることの意義や子どもと関わる重要性について考える。

6. 単元について

①教材観

普段乳幼児と接する機会の少ない生徒たちに、子どもの心身の発達について生徒自身の乳幼児期をふりかえりながら理解し、新生児人形を使ったお世話を体験することで、保育の重要性を考えることができるようになることをねらいとしている。また、子どもが生まれてからの衣食住に関する内容を、子どもの発達段階に応じて適切に選択する力をつけるようになること、乳幼児の目線に立って、安全な生活環境をどう構築すべきかを考え、生徒自身の親や周囲の人の話をふまえて生徒自身も周りの人に育ててもらった時期があり、生徒自身もまた保育を担う一人であることを自覚し、現代の保育環境の問題点を考えながら、子どもを生み育てることの意義を考えることをねらいとしている。

②生徒観

生徒の中には、将来保育に関する仕事に就きたいなど、保育に関心のある生徒もいるが、多数は保育に関して漠然としたイメージしか持っていないと考えられる。そこで、生徒自身の乳幼児期をふりかえることで保育を身近なものに感じることができたらと考える。また、座学だけでなく、実習を取り入れることにより、より保育に関して具体的な考えを持てるようになって考えられる。

現代は様々な生活環境ゆえに出生率も低い、子どもを育てることは、親や周りの人も育つことのできる機会であり、生徒自身も親や周りの人と共に育ってきたことを考える機会になればと思う。

③指導観

第一次では、事前にプリントを配布し、生徒自身の乳幼児期の成長の記録を、母子手帳から記入させておく。記入できなかった生徒については、教員の持参資料から記入する。また、この一年の生徒の心身の発達も記入する。乳幼児の言葉の発達や行動の発達に関する VTR を見せ、発達段階に応じたおもちゃを選択し、気づいたことを発表させ、乳幼児期の心身の著しい発達を理解させる。

第二次では、新生児人形を使用して、グループに分かれておむつ替え、沐浴、素手での抱っこ、抱っこひもでの抱っこを体験し、新生児のお世話に関する注意点を理解し、子どもを育てるイメージを抱かせる。

第三次では、子どもにまつわる衣食住や安全対策、親になるとはどういうことかを考えさせる。乳幼児期の発達段階に応じた食事の内容を理解させ、乳幼児期の間食の意義も理解させる。また、実際に市販のベビーフードを試食させ、感じた事を発表させ、発達段階に応じた食事内容を適切に選択できるようにする。乳幼児期の被服環境については、乳幼児の実際の衣服を見せて、子どもの衣服と大人の衣服の違いを理解させ、乳幼児期の被服選びで大切な事について考えさせる。さらに、子どもの健康に配慮する点や子どもの安全のために日常生活で注意すべき点について、子どもの目線に立って考えられるようにする。そのうえで、子育てを経験してきた生徒の親や教員を含む身近な人から、子育てを経験して感じたことについて聞き取りし、子どもを育てる意義を理解させる。

第四次では、現代の子育て環境と昔の子育て環境のさまざまな違いについて考えさせ、子どもにはどのような権利があり、どのような支援や制度の形があるかを理解させる。そのうえで、理想の保育環境とはどんな保育環境か考えさせる。

7. 指導計画 (全 7 時間)

- 第一次 子どもの育つ力を知る・・・2 時間
第二次 子どもとのふれ合いから学ぶ・・・1 時間
第三次 親として共に育つ・・・5 時間

- ・ 1 時 子どもの食事・・・1 時間（本時）
- ・ 2 時 子どもの被服・健康・安全・・・2 時間
- ・ 3 時 親として育つ・・・2 時間

第四次 これからの保育環境・・・1 時間

8. 本時の目標

①本時の目標

- ・新生児から幼児までの間の食生活に関心をもつ。（関心・意欲・態度）
- ・発達段階に応じた食事の内容を理解する。（知識・理解）
- ・乳幼児期の食事の重要性を理解する。（知識・理解）
- ・乳幼児に適切な食事内容を考えることができる。（思考力・判断力）

②本時の展開

○主なる指示・発問 ■評価

区分	学習活動と内容 (予想される児童の反応)	指導上の留意点・支援・評価 (教師の活動)	準備物・資料等
導入 3 分	1. 前時の学習の復習 ・新生児の世話についての復習。	○「前回までは新生児の世話について学習しました。世話をするという観点から、乳幼児の生活を知ることができました。」	
展開 44 分	乳幼児期の食生活を学習しよう 2. 本時の課題の理解 ・本時の課題を知る。 3. 乳児期の食事について学習しよう ・乳児期の食事である母乳のメリットとデメリットを知り、粉ミルクの役割を知る。 ・混合栄養という方法を知る。 ・授乳時のスキンシップの重要性を理解する。 4. 離乳食について知ろう ・グループにわかれて離乳食（ア～エ）を試食し、感じた事を記入し、発表する。 ・発達に応じた離乳食の特徴を知る。 ・試食した離乳食（ア～エ）がそれぞれどの時期に合うか確認する。 5. 幼児食とは ・幼児食の特徴を知り、離乳食との形状の違いを理解し、幼児の食事に対する意欲を引き出す食事の重要性を理解する。 6. 間食の役割と注意点 ・幼児期の間食は楽しむ意味だけでなく、栄養を補う役割があるが、与える際に注意すべき点についても理解する。	○「今回は乳幼児期の食生活について学習します。」 ○「スーパーやドラッグストア等で乳幼児期の食事を販売しています。」 ・乳幼児期の食事はどのようなものが市販されているか確認する。 ■乳幼児期の食事はどんなものがあるか考えようとしているか ○「乳児期の食事には母乳と粉ミルクがあります。それぞれの特徴と役割を学習しましょう。」 ○「離乳食をいくつか試食して、それぞれどのような見た目、味、食感であるか感じた事を発表してもらいます。」 ・どの発達段階に適応した離乳食か予想し、離乳食の特徴を学習してから、どれが適切であったか確認する。 ○「幼児食の特徴を知りましょう。」 ・幼児食からは食事に食べる楽しみも付加されることに気づかせる。 ○「幼児期の間食について考えましょう。」 ・間食として適切なものの選択と、ただただ食べるによる虫歯のリスク、夕飯との兼ね合いも考えさせる。	粉ミルク ベビーフード プリント ベビーフード 試食皿 スプーン
まとめ 3 分	乳幼児期の発達段階に応じた食生活を理解する 7. まとめ ・乳幼児期の食事について理解する。 ・次時の連絡を聞く。	■発達段階に応じた食事内容を理解しているか ・次時の連絡をする。	

③評価（の観点と方法）

- ・乳幼児期の発達段階に応じた食事について理解できたか。
- ・乳幼児の食事での注意点が理解できたか。
- ・乳幼児の発達段階に応じた適切な食事を考えることができるか。

④板書計画

乳幼児期の食生活 1. 乳児期の食事（母乳と粉ミルク） * 母乳のメリットとデメリットを考えよう	・ 消化吸収がよい。免疫物質を含んでいるので病気になりにくい。 ・ 与える手間が楽 ・ 出産後の母体の回復を早める
--	---

・与えられる人が限定される

・母親の感染症や薬の使用、乳児の状態、母乳の分泌状態などにより与えられない

* 粉ミルクの役割

・母乳のデメリットを補える

* 混合栄養（母乳と粉ミルクの併用）という方法もある。

* 授乳時のスキンシップを大切に

2. 離乳食について知ろう

離乳食で栄養を確保する

かむ事を覚え、家庭の食生活に適応していく

* 離乳食の開始時期と内容

・生後5～6ヶ月頃 1日1回1さじずつ

滑らかにすりつぶした状態

・7～8ヶ月頃 1日2回食

いろいろな味や舌触りを楽しめるように食品の種類を増やしていく

・9～11ヶ月頃

食事のリズムを大切に。1日3回食に進めていく

家族で楽しい食卓体験を・歯茎でつぶせるかたさ

・12～18ヶ月頃

1日3回の食事のリズムを大切に

自分で食べる楽しみを手づかみ食べから始める

歯茎でかめるかたさ

3. 幼児食とは

・かたさや大きさに配慮して調理された食べ物

・直接手で食べられるもの

・歯ごたえのあるもの

・自分で食べる意欲やかむ機能を高める

・偏食にならないようバランス良く調理

・嗜好や味覚を豊かに育てるような味付け

4. 間食の役割と注意点

・間食により栄養を補う

・時間を決めて一定量を与える





・糖分、塩分、食品添加物のとり過ぎに注意する。

⑤準備物

教師：ワークシート、粉ミルク、市販のベビーフード、試食皿、スプーン

⑥配布資料

ベビーフードを試食して感じた事を書いてみよう

見た目	味	食感
		
		
		
		

どの発達段階に適したベビーフードか予想してみよう

	予想	解答
生後5～6ヶ月頃	() ()	() ()
生後7～8ヶ月頃	() ()	() ()
生後9～11ヶ月頃	() ()	() ()
生後12～18ヶ月頃	() ()	() ()

〇年〇組〇〇番 氏名

発達段階に応じた離乳食の特徴を書こう

生後5～6ヶ月頃

生後7～8ヶ月頃

生後9～11ヶ月頃

生後12～18ヶ月頃

程度しっかりとしているものだった。筆者はSへの質問とコメントを12月上旬までに送り、その質問への回答などが12月15日に届いた。コメントと質問、そしてその回答をあわせて、以下に掲げる。

- 「第四次」の「次」は「時」のはずです。
→「時」のようです。修正しておきます。ちなみに、私が参考にした京都教育大の指導案には「次」

の記載があり、「時」で記載されている指導案とどう違うのかよくわかりませんでした。
(筆者の現時点でのコメント)

「次」の中にさらに「時」があるので、この「次」は中項目といったものであると思われる。そのため、以下に掲げた資料2については、「次」に訂正してある。

- 離乳食はどれくらいの値段がするのでしょうか

か。この授業で幾らのお金がかかるのですか。

→離乳食は1つの瓶で80円から100円程度で販売していました。月齢12ヶ月からのものになると、レトルトパウチの形で販売していました。生徒をグループに分けたとして、おおよそ6グループ、1つの瓶を例えば2グループ位で分けても十分試食としては足りる量かと思います。月齢別で4種類用意し(4×3×100=1200円)、試食皿とプラスチックスプーン等で500円がかかり、総計で1700円程度はかかるかと思います。

3. 試食する際に、単に「感想」を書かせるのではなく、ポイント(視点)があるのがよい。本当は、生徒がポイントを前時までにみずから設定できれば、なおよいのだが…。

→ベビーフードについての感じた事は、前回添付したワークシートに、見た目、味、食感に視点を置いて感じた事を生徒に書いてもらうようにしています。指導案にその点が抜けていますので、書き換えておきます。O先生がおっしゃるように生徒自らポイントを考えるというのはいいですね。その場合はこちらもO先生のおっしゃるように、前時に決めておくほうが時間としても効率が良いので、前時に決めると良いかなと思います。

それで、前時はグループに分かれて新生児人形でのお世話の授業なので、例えばグループごと視点を2つとか3つ決めて、グループごとでの視点を本時に発表してもらうのがいいのかなと思ったのですが、どうでしょうか。その場合はグループによって視点が違う場合があるので、他のグループの視点も記入できるようにワークシートの内容も変更します。

4. 「指導上の留意点・支援・評価(教師の活動)」の欄の■に書いてある評価については、うしろに4つの観点のどれにあたるのか(たとえば、「知識・理解」など)、さらにどうやって評価するのかという方法(たとえば、「机間巡視による観察」など)を書いた方がよいです。

→内容、理解しました。修正して再度提出します。ちなみに、やはり本時の展開は、A4一枚におさめられるように記述してあるほうが望ましいですね。

5. Sさん曰く「単元計画は、『評価基準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』に記載されているような形で作ったほうがいいのかわからず、指導案にまとめて記載する形にとどめてしまいましたが、必要であれば、『評価基準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』に記載

されているような形式で書いてみます。」とのこと、書けるのであれば、頑張ってください。

→一度、この単元(保育)で、『評価基準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』に記載してあるような単元計画で書いてみます。

そのうえで、この指導案にもとづいた授業を録画して1月末頃までにDVDなどで送るように指示をした。最終的にはインターネットでファイルをダウンロードする形で2月1日に送ってもらった。Sは、「模擬授業、今回は近くの会議室を借りて録画したのですが、ホワイトボードが動いて、文字が書きにくかったり、2回録画したのに2回目はバッテリーがなくなり、途中までしか録画できませんでした。2回目のほうが時間配分等うまくいったので、撮れていないと後から気づいて悲しかったです。1人で録画したものの、前に立つというのは緊張してしまい、動きが硬いと思いました。自宅でもまたうまく録画できる方法など、次のために模索していこうと思います。」というメールをよこしている。

筆者はこの模擬授業についてのコメントを2月13日に送った。以下のようなものである。

〈全体〉

- ・落ち着いて、授業に臨んでいる。
- ・しゃべり方もゆっくりとしていて、よい。ただし、ビデオのせい、音量が足りないし、もう少し「はった声」を出したほうがよい。
- ・内容の流れはスムーズ。
- ・学生の参加度は、離乳食の実食があるので、これぐらいかなとは思いますが、そのようなおোগがかりなものではない、一対一の対応関係が必要である(ただし、実際に生徒がいない中でやるのは難しいが)。
- ・ホワイトボードを使用しているのかもしれませんが、板書構成には以下に見るように難がある。分量も多すぎるのでは?と思う。よいところは、最後まで一番大事な「乳幼児の食生活」を消さなかったところ。これが「本時の課題」であるから本当は、「疑問形」にしたかった。
- ・また、マジック(本当はチョーク)の持ち方は、鉛筆握りではなく、上からつかむようにもつのが本来の持ち方である。

〈授業の流れにそって〉

- ・復習は、「～について学んだ」のあとに、「わかったことは、△△である」とその学んだ内容の具体的内容を指摘する必要がある。あなたの場合

には、「世話について」何を学んだのかがみえない。というより、世話に「ついて」の「ついて」とは何かがわからない。世話とは何かという「概念」か、世話の「方法」（やり方）か、世話の問題点か、「ついて」が本当に漠然としているのである。

- ・そのうえで、「本時の課題」も「乳児の食生活について」の「ついて」をもっと具体的に示してほしい。もっといえば、課題は「疑問形」で提示して、授業の最後に「その答え」がくるようにするべきである。
- ・課題の説明ときに本物をもって来る「実物教授」はグッド。生徒に「知っていますか」と聞くのもよい。本当なら、「どんなのを知っている」と直接生徒の発言がほしい。
- ・本論にはいて、母乳のメリットについて、最初にメリットをすべて板書してから説明するのか？ 私なら、一つずつ板書して説明する。デメリットの場合も同様である。
- ・そのうえで、デメリットを次の「粉ミルク」とつなげたかった。あなたは、「母乳のデメリットを補える」とだけ板書していたが、本来は（黒板が大きければ）、デメリットの横に、「デメリットを克服するために…」と粉ミルクの特徴を書いていく方が、生徒にとってはわかりやすい。混合栄養についても、たとえば「よい点」を黄色のチョークで丸をつけてみるとわかりやすい。授業ではふれなかったが、粉ミルクの問題点（高い、添加物・薬など）も、母乳のメリットの対比で説明できる。
- ・もしここで「アクティブ・ラーニング」的な指導をしようとするならば、たとえば母乳のメリット・デメリットを説明したうえで、「それでは…」と生徒たちに「粉ミルクの特徴」を考えさせればよいことになる。ここで言いたいのは、生徒に考えさせるには「データ」（考える素材、基）が必要である、ということである。〇〇高校ぐらいのレベルであれば、「考えろ」といえば、出てくるかもしれないが、私ならやはりデータを示して考えさせたい。
- ・スキップのところでは、もし自分の経験をしゃべってもよいというのであれば、体験が一番強いので自分の経験を話してもよい。いやならば、よいが…。私は当然、おっぱいをあげたことはないが、娘に粉ミルクの哺乳瓶であげたことは、今でもはっきりと鮮明に覚えている。消毒に非常に気を使い、温度も本当にこれでよ

いのかと悩んだこと、そしてミルクをあげたあとにげっぷをさせるのが、はじめは本当に大変であったことなどなど、経験者にしかわからないディテールがあるはずで、それがリアリティをもたらすのではないかな。また「スキンシップ」というのが乳児だけではなく、お母さんにとっても大切なことだということは、話したほうがよいのではないかな。

- ・本時の一番大事な「離乳食について知ろう」についてであるが、まず、ここで最初に離乳食の「意味」というか「役割」を最初におさたほうがよかったのではないかな。
- ・生徒に実食させたあと、その見た目、味、食感を発表させ、板書する部分は非常に大切である。なぜなら、生徒は離乳食の一部しか食べていないから、ほかの離乳食の特徴がわからないからである。だからこそ、あなたがどれほど意識していたかどうか不明であるが、板書したことをしっかりとみんなの前でもう一度声に出して読み、ひとつずつ確認することがとても大事になる。「共有化」ということである。
- ・これまた黒板の大きさによって思われるが、生徒が食べた結果の表は、本来ならばそのままにして、次の内容に進むべきであった。まさに、この表を使って理解したほうが絶対によいからである。
- ・繰り返しになるが、ここでも板書をずっとしてから説明があとに続く。せめて「生後5～6か月」の部分だけで板書を終えて説明してもよいのではないだろうか。また板書を消すタイミングもあまりに早すぎる（これも黒板の大きさに関係あるのだろう）。そして二枚目の板書の「生後12～18か月」までは、本来ならば「生後5～6か月」から一連の内容としてまとめて生徒の前に提示すべき内容となっているはずである。
- ・続いて「幼児食」となるが、最初から「幼児食のイメージ」を聞くのは、やや難しいという感じである。そのクラスとの人間関係がどれほどできているかによるが、データがないなかで（自分の知っていることだけで）、イメージを聞いても、なかなか答えが出にくいのではないかな。あなたの答えも「大人の食事と少し似ている」だったので、私も拍子抜けした。ただし、この感覚は古い人間のものであるのもので、もしかすると今の生徒は、「イメージ」といえば、どんどん答えてくれるのかもしれない。
- ・これまた別なことになるが、「すべてを板書し

てから内容を説明する」というやり方についてである。ちなみに時間を計ると、36分28秒に書き始めて39分21秒まで書いていた。約3分間書き続けている。そのうえで、すぐに説明をしていたが、生徒はまだ書き終えていないのではないか。内容面でいうと、幼児食においては、「自分で楽しんで食べる」がキーワードのようなので、黒板に「楽しさ」と色をつけて（○をつけて）、書いてもよかったのではないか。

- ・最後の「間食」の部分になると、だいぶ疲れてきたようで、さらに声が小さくなる。また、板書も書けば書くほど、左にどんどんさがっている。注意したい。
- ・最後の「まとめ」はいただけない。なにを学んだのかみえてこない。あなたは「乳幼児の発達段階に応じた食生活を学習できました」と言っていたが、その中身がみえてこない。1から4にわけた内容を振り返り、さらに一言でいうと乳幼児期の食事で最も一番大切なことは何か、を説明しなければならない。そのような答えがないということは、「本時の課題」がぼやけていたことと関係がある。たとえば「乳幼児期の食生活で一番大切なものは何か」という疑問形の「本時の課題」であったとしたら、その答えが、最後の「まとめ」にくるであろう。また「保護者がどのような対応をすればよいか」であれば、その答えが「まとめ」にくるであろう。このように課題が少し違っても、授業でやる内容はそれほど変わらないことにも目をむけてほしい。授業で学ぶことが基礎、データになって、「本時の課題」が解決されるのである。

Sからは当日にリプライがあった。それをまとめて掲げる。

色々と私自身も気づく点が多く、助かりました。保育の単元は、おそらく他の実習生にはない、自分自身の体験が、生徒の良い学習になるとは思っていたのですが、実体験はほとんど話すことができませんでした。確かに特に母乳や粉ミルクの話は、自分の体験談を話しても良かったなと思いました。私は生後1ヶ月以降母乳のみで育てていたもので、切り替わるまでの苦労であったり、母乳をあげていると本当にお腹がすいて、1日に5食くらい食べていたことや、そのことで、本当に自分の身体から作られているのだと実感したことを覚えています。粉ミルクも、最初だけ使っていまし

たが、確かに毎回の消毒、お湯の温度、色々気を遣いました。粉ミルクといえば、缶の粉末とばかり考えていましたが、産後、タブレット状のものがあることを知り、感心したことも記憶にあります。

板書については、O先生のおっしゃる通りです。もう少し板書の練習は必要だと思っていきます。次回の模擬授業撮影の時は、他にいい方法がないか考えてみます。

それから、肝心のまとめがしっかりできていないのも、一番の反省点です。生徒自身が理解できているかという動きも確かに見えておらず、一方通行の授業で終わってしまった感じでした。次回に改善します。

結構予想以上に板書に時間を取られたという感想を私自身は持ったので、もう少し板書は要点にまとめて、他のところに時間を使えるようにしたいと思います。

(3) 住生活に関する模擬授業

その後、4度、指導案と動画が送られてきた。2016年3月の「被服の組成表示」、11月の「職業生活を設計する」と「安全で快適な住生活」、そして2017年3月の「誰と食べる？ どう食べる？」である。その間にSは、板書の練習のためにベニヤ版に黒板塗料を塗った自家製の黒板を作成して、自宅で練習を何度も行ったそうである。また3月26日には「子どもの育つ力を考える」の模擬授業を筆者の前で行った。

それらの過程で、ある程度、指導案もしっかりと書けるようになり、模擬授業も堂々としてきた。そこで、ここでは3番目（総計で4番目）の「安全で快適な住生活」についての指導案と模擬授業についてみてみる。それが資料2である。

これに対して筆者は、次のようなコメントを送った。

指導案

- ・5の単元目標は、動詞一つごとに、文を区切る。私なら、「・住生活の～、科学的に理解する」と「・住空間～の課題を見出す」「・主体的な～身につけている」の3つに分ける。
- ・8の③は、評価（の観点と方法）とありながら、観点のみしか記されていない。たとえばふたつめの「災害の内容を理解する」について、理解できたかをどうやって判断するのかということが、（方法）である。たとえば（机間巡視）という方法で、という風に。
- ・また、これと関連して、単元の各時間のおける

資料2 4度目の指導案

第〇学年家庭科学学習指導案

〔指導者 指導担当教員 1. 日時 2. 学年・組 3. 場所〕については、資料1と同じであるので省略する…筆者注

4. 単元名 住生活をつくる

5. 単元の目標

住生活の科学と文化に関心をもち、住居の機能や住環境などについて科学的に理解し、住空間の計画と住環境などの課題を見だし、主体的な住生活を営むために必要な知識と技術を身につける。

6. 単元について

①教材観

住居がある暮らしというのは生活の基本であり、災害等により今まで当たり前と考えていた住居内での暮らしが困難になる場合がある。住居の中で寝る、食べる、学習するなど様々な人にとって必要な生活行為をしている。また、それらに適した場所が住居の中には設けられており、家の中の居心地のよさにもつながっているということを理解する。また、平面図を読み取り、住居に関する災害や事故を理解し、カビや結露、シックハウスなど現代住宅の問題点や今後求められる住環境を理解したうえで、今後生徒自身が生涯よりよい住まいを選択し、自分の力で工夫し改善していける力を養うことをねらいとする。

②生徒観

生徒それぞれの現在生活している住居は一緒に住んでいる人数や、戸建や集合住宅など様々な違いがある。戸建と集合住宅だけで比較しても様々な違いがあるが、それぞれのメリットやデメリット、建物だけでなく周りの住環境にも目をむけ、今、生徒自身が家族と住居を築いたときに、建物の構造や間取りだけでなく、周りの住環境や災害への備え、ライフステージに合わせたよりよい住まいを計画、選択、実行していけるようにする。

③指導観

第一次では、住居の機能とは何か考え、住居の中での生活行為にふさわしい住空間を適切に選択し、住居は生活していく中で必要不可欠であると改めて考えさせる。また、間取りの歴史的な変遷から、畳から洋間や卓座に床座からテーブルに椅子といったような生活様式の変化を理解し、平面図から空間や生活を読み取れるようにさせる。

第二次では、自然災害と人為災害による住居への影響と、住居内の事故について理解し、日頃からそれらを防ぐためにできることを考えさせる。特に近年自然災害については災害の規模が肥大化しており、日頃から少しでも備えておくことが大切である。健康で快適な住生活を営むために必要な条件をみとるために住居を適切に選択し、工夫や改善していけるようにさせる。

第三次では、住居を長持ちさせて使い続けることができ、持続可能性を高めていける方法を理解し、シェアハウスなど、住まい方も時代とともに変化していることをふまえながら、現代の暮らしやすい住環境とは、第二次でも学習した安全性、保健性だけでなく、利便性、快適性、持続可能性が整っていることであり、住民と行政がともにまちづくりを進めていくことがより良い暮らしにつながることを理解させ、将来自立して新たな住まいで暮らしていくときに、生徒自身にとって居心地のよい住まいを選択し、工夫していけるような力を身につけさせる。

7. 指導計画（全7時間）

第一次 住生活について考える・・・2時間

第二次 住生活の計画と選択・・・3時間

・安全で快適な住生活・・・1時間（本時）

・健康な住生活・・・1時間

・誰もが住みやすい住まい・・・1時間

第三次 これからの住生活・・・2時間

8. 本時の目標

①本時の目標

- ・安全で快適な住まい方や住環境について考えようとしている。（関心・意欲・態度）
- ・住居内外で起きる災害の内容を理解する。（知識・理解）
- ・安全に配慮した室内整備や住環境について情報を整理し、検討することができる。（知識・理解）
- ・安全に配慮した住環境の課題を認識し、その知識を身につけている。（思考力・判断力）

②本時の展開

○主なる指示・発問 ■評価

区分	学習活動と内容 (予想される児童の反応)	指導上の留意点・支援・評価 (教師の活動)	準備物・資料等
導入 3分	1. 前時の学習の復習と本時の学習内容 ・平面図と住居計画についての復習。	○「前回は平面図を読みとることでどんな生活ができるかと、ライフステージに合わせた住居の選択について学習しました。」	
安全で快適な住生活を送ろう			

<p>展開 44分</p>	<p>2. 自然災害と人為災害を考えよう</p> <p>*安全で快適な住生活のイメージを考える。</p> <p>*自然災害と人為災害に当てはまるものを知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然災害（地震、津波、洪水、豪雨、雪崩など） ・人為災害（ガス爆発、騒音公害、火災など） <p>*二次災害として考えられるものを知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交通網の切断、火災など <p>*火災の原因や出火場所などを考え発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・放火が最も多く、次いでタバコ、コンロが三大出火原因である。 <p>*災害に対して備えられることを考え発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・住居を耐震、耐風、耐火構造にする、家具を固定する、非常持出袋の用意、避難場所の確認 ・戸締り強化、二重施錠、地域のコミュニケーションを密にする。 <p>3. 住居内の事故</p> <p>*住居内のどこでどんな事故が発生しやすいか考え発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・乳幼児や高齢者の事故が多い。 ・特に浴室での溺水や階段などでの転倒、火災が多い。 ・住居内の事故を防ぐためにできることを考え発表する。 	<p>○「今日は安全で快適な住生活について学習します。」</p> <p>○「安全で快適な住生活ってどんなイメージですか。」</p> <p>○「災害には、自然災害と人為災害に大別されます。」</p> <p>○「その自然災害と人為災害からさらに災害が起こることを二次災害といいます。」</p> <p>■災害について考えようとしているか</p> <p>【関】〈評価方法〉観察、ワークシート</p> <p>○「住居の災害の中で最も多い火災について考えていきましょう。」</p> <p>■火災の原因や出火場所はどことが多いか考えているか。【思】〈評価方法〉発表</p> <p>○「災害に対して備えられることにはどんなことがあるか考えましょう。」</p> <p>■災害を防ぐため、災害が起きた後極力早く復興できるように日頃どうしていったら良いか考えているか。【思】〈評価方法〉発表</p> <p>○「住居内の事故について考えていきましょう。プリントの家の鳥瞰図から家の中の危険な箇所や問題点を見つけ出し○をつけて、なぜ危険だと考えるのか理由も書いてください。」</p> <p>■住居内でどのような事故が発生しやすく、どうしたら防ぐことができるか考え、実践しようとしているか。</p> <p>【思】〈評価方法〉発表</p>	<p>ワークシート</p>
<p>まとめ 3分</p>	<p>4. まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・災害は防止、事後のために備えておくことが必要であり、住居内の事故も様々な対策で防ぐことが可能であることを理解する。 ・次時の連絡を聞く。 	<p>○「安全で快適な住生活のためには、住居の構造から考えたり、日頃の暮らしの中で備えておいたり、整理整頓で防いだり、地域の方とのコミュニケーションを図っておくことで防げるとわかりました。」</p> <p>○「次の時間は、誰もが住みやすい住まいについて考えていきましょう。」</p>	

③評価（の観点と方法）

- ・安全で快適な住まい方や住環境について考えようとしているか。
- ・住居内外で起きる災害の内容を理解できたか。
- ・安全に配慮した住まいのために室内と住環境で改善できる点を見つけることができたか。

④板書計画

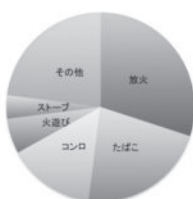
安全で快適な住生活を送ろう

安全で快適な住まいのイメージ

- ・地震に強い
- ・防犯設備がある
- ・家中があたたかい
- ・家の中がきれい

1 災害と住まい

	災害の種類	具体例
災害	自然災害	地震、津波、洪水、豪雨、雪崩など
	人為災害	火災、ガス爆発、騒音など
	住居の人為災害	火災、空き巣、強盗など



火災警報器

札幌市は平成20年6月1日から設置の義務化
天上か壁面に取り付ける。

自然災害や人為災害に向けてどのような「備え」が必要か考えよう！

住居を耐震構造にする

家具を固定する

非常持ち出し袋の用意

避難場所の確認

戸締り強化、二重施錠、地域のコミュニケーションを密にする

2 家庭内の事故



火事

ストーブが倒れそう

おぼれる

積み木につまずく



転びそう

火事になった時に逃げ遅れそう

転落

戸に指をはさまれる

⑤準備物

教師： ワークシート

4つの観点ごとの評価基準の練習もしたほうがよいのではないかな。→すでに資料をわたしていると思いますが、わからなければ言ってください。

- ・ 8の②の本時の展開。あなたの書き方があるかもしれないが、文で書いたり、体言止めをしたり、自分で何かきめていることはあるのか。私は原則として文で書くことをすすめている。もしくは「1 前時の～」「2 自然災害～」という数字がある部分だけは文で記し、それ以外は体言止め、といった形にしてはどうか。
- ・ また、「2」といった数字、「※」「・」の使い分けもわからない。1と4では「・」となり、「2」「3」では、「※」があり「・」があつたりなかったりとなっている。

授業

- ・ 全体として大事だと思ったのは、いかに生徒に自分の家の状況や災害にあったときのイメージを膨らませるかということ。そのために、前時にしっかりと「来週は、自分の家のことをやるから、しっかり観察してきてね。」などを述べた方がよい。その点で、授業の途中で、あなたの体験である「断水」のことを話したのは非常によいと思う。
- ・ 板書量はやや多いかな？ という感じだが、〇〇高校であれば大丈夫だろうか。色が白だけというのはおかしいので、黄色・赤色なども使おう。
- ・ プリントはしっかりとつくられていると思うが、最初の「イメージを書いてみよう」と下の「必要か考えてみよう」の欄が小さすぎるのではないかな。自分やグループの考えを書くだけではなく、あなたが板書したことも書くとするば、それはとても書けない。少なくとも私には書けなかった。
- ・ 定規を使って線をひいていたが、実際にはそのようなことはほとんどできないはず（もっと表が大きくなる）。数学の先生に三角定規の教具をお借りするか、自分でまっすぐに引く練習をする。
- ・ 授業時間は、録画時間は35分程であった。実際の授業は生徒に考えさせる時間などがあるので、これぐらいの内容で十分であると思う。

- ・ 安全で快適な住生活のイメージの学生の意見を板書する際、「家じゅうがあたたかい」と記していた。家全体という意味であれば「中」という漢字となるので、ひらがなの場合は、「ぢゅう」となるのではないかな。ちがうかな？
- ・ 安全で快適な住生活のイメージを聞いた後で、その反対のこと、例えば「地震に強い←→弱い」ということを続いて聞いたのは、次の内容のつなぎであろうと思われる。それはそれでよいと思うが、板書計画にそれは示されていないし、指導案にもない。どういうわけかな？
- ・ また、このイメージの部分は番号がなく、次の分から「1 災害と住まい」として番号がついている。イメージは大した内容ではないという意味かな。せめて「0 ～～のイメージ」とすべきではないかな。
- ・ 自然災害と人為災害の表で、人為災害と住居の人為災害の間の線と、自然災害と人為災害の間の線が一緒であることはおかしい。住居の人為災害は人為災害の一部であるから、例えば点線などにした方がよい。
- ・ この表のあとに、模造紙でつくった星形の紙を貼ったのはグッド。使い方がうまい。
- ・ 指導案との関連で、この部分で「火災の原因や……考えているか」のあと、評価方法として「観察」とあるが、少なくともそのようなことをしていたとは見えなかった。実際には机間指導などをすること。
- ・ 火災について、模造紙をあとから貼ったのはどういう意味かな。生徒自身に考えさせて予想させるのか、それとも、この表をみて生徒に確認させるのか、どちらだろうか。もし前者であるのならそれでもよいが、後者のような作業（すなわち、表やグラフのよみとり）は、ぜひとも授業にとりいれてほしい。今気付いたが、配布プリントにこの表が記されているのだから、あとから貼ったのは、あなたが忘れていたからであろう。なお、この表の出典などを記した方がよい。また、あなたは教科書や資料集などは使わないで授業をしようと考えているのだろうか。教科書の本文を読む必要はないと思うが、表やグラフはどんどん使おう。
- ・ 火災報知器の説明の後、ここまでの部分の小ま

とめを行ったうえで、次の「支援災害や～～必要か考えよう」につなげているのはグッド。このようにところどころで小まとめをするのか非常に有効的である。また、あなたは指示や説明を一度しか言わないが、高校生であっても同じ内容を、すこし言葉をかえて二度説明することは大事である。とくに、生徒に何かをさせるときは、そうしないと「何をすればよいかわからない」という状況を生み出しかねない。

- ・プリント一枚目の最後の部分の「自然災害や…」のような「備え」が必要か」の「か」が、板書されていない。
- ・指導案での「2 自然災害と人為災害」の最後から「3 住居内の事故」への展開が、唐突であると感じた。少し工夫が必要だと思う。
- ・指導案での「3 住居内の事故」の最初の部分、プリント2枚目の最初の部分は、授業でやったか。板書をしたか。
- ・続いての内容である「鳥瞰図から、家の危険な箇所をみつけ…」の作業は、まったくこの図の説明なしに行うのか。
- ・また「鳥瞰図」という言葉自体の説明はいらないか。
- ・さらに、プリントの指示（○をつけてみよう）と指導案の指示（○をつけて、なぜ危険～理由も書いてください）が違うのはなぜか。
- ・同様に、あなた自身の板書も、理由があったりなかったりするのとはなぜか。
- ・そのうえで、時間の関係か、事故に関するまとめが十分でなかったような気がするが、どう考えるか。
- ・最後にまとめをしっかりとしていたのはよいが、私なら、プリントの最後に、そのまとめを書く欄をもうけ、生徒に書かせる。何度も述べていると思うが、授業はわからなかったこと（＝未知）をわかっていく（＝既知になっていく）過程である。この授業でいえば、目標が「安全で快適な住生活とはなにか」というものであり、その答えが、授業の最後に来るのが正しい。それを生徒に書かせるのはあたりまえである（生徒も復習がしやすいはず）。

3. 教育実習の実際と事後指導

(1) 実習中の日誌の書き方に関する指導

Sは4月30日に札幌に戻り、5月1日に実習校訪問に行っていただく大学のI先生にもお会いすること

ができ、さらに教育実習で使用する「赤ちゃん人形」も借りることができた。この赤ちゃん人形は、実習校に一体、自作のものが一体あり、あわせて三体で教育実習での授業に利用した。1クラス40人の授業では、一体ではとても足りず、三体あって非常に重宝したそうである。

教育実習は5月8日にはじまった。前日には日誌の書き方（①表紙の学籍番号について、②「実習校の現況」を何日現在にすればよいのか）についての質問が筆者にあり、①科目等履修生の番号である、②「現況」を書いた日付であり、普通は実習初日になる、と答えた。さらに実習中の5月14日には以下のような質問がきた。

先週分（5月8日～12日のこと…筆者注）は授業実習の記録、本時の指導計画を書いってしまったのですが、来週分について、枚数が足りなくなります。そこで、足りないのが4時間分くらいで、例えばなのですが、同一の日に同じ指導案の授業の場合、本時の指導計画を書き換える作業がなければ、授業実習の記録部分のみをコピーして、同一の日、同一指導案の上に糊付けするような形で貼るのはおかしいでしょうか。日時順で書いていくと、間に違う指導案のものが入ってきたりしますが、形式として、日時順ではないといけなければ、4時間分ほどを後ろにまとめて貼るしかないのかなと思っています。

どちらの形式が良いのかがわかりません。また教えて下さい。

筆者は翌日に次のようなメールを送った。

同一内容の指導案の場合、左側の一番下に「同一の……」という部分があり、本時の展開の部分などは省略して、「感想や指導を受けた内容」だけを重ねて貼るようになっていきます（私が作成した「日誌の使い方」のプリントにあります）。

ただし、もういろいろと考えて1週間分過ぎたのですから、あなたが考えた二つのやり方のうち、どちらでもよいと思う方を採用してください。その際には、実習担当の先生の許可（というよりも説明）をもらってください。

筆者のメールにあるように、「日誌の使い方」というプリントを送っているのだが、それを十分に理解していなかった模様である。通常の実習生の場合には、プリントを読み上げ、さらに説明する部分であり、遠距

離にいる故の指導の難しさがでている。

(2) 教育実習の概要

5月8日から2週間の実習については、本論が中心眼目としている事前事後指導とは別のことであるので、概観する程度とする。まず、指導教諭は家庭科教諭であるK先生と1年7組のクラス担任であるS先生（国語）の2人であった。表2は、2週間の実習の概要が記されている。初日にオリエンテーションが4時間あった。校長講話、教務部長講話、教育相談部長講話、そして進路指導部長ならびに生徒指導部長講話である。2日目から早速授業実習がはじまった。総計18時間であり、その内訳は3年生2クラスに対しての調理実習（2時間扱い）が4時間、1年生4クラスに対しての保育領域「子どもとともに育つ」（4時間扱い）が14時間であった。2週間実習であるので、授業実習が早くから始まっており、その分、観察実習は11時間と少ない。水曜日7時間目にはLHRが行われており、10日には全校対象の交通安全講話を、17日には担当クラスである1年7組の「2年からの進路選択について」を観察している点も興味深い。

授業実習で指導教諭のK先生から繰り返し指導されている点は、日誌によれば調理実習関連で2点である。それは、①教師側の下準備が非常に大切である、体力勝負であるともいえる、②生徒の自主性を尊重しつつ、安全面には最大限気を配ること、が中心であった。

②に関して言えば、「〇分までには、焼き始めよう」といった指示はしっかりとすることも指導されている。保育領域はいわゆる座学であり、方法面でいくつかの指導を受けている。すなわち、①大きな声での指導が大切で、特に語尾が消えてなくなりそうである、②生徒の意見は復唱してみんなに共有化させる、また

意見にはフォローが大切である、③挙手などをさせる場合はあらかじめ選択肢をしっかりときめておき、締め言葉の準備しておく、④すべてのプリントを最初に配布するのではなく、内容を判断してタイミング良く少しずつ配布する、⑤プリントは、「なぜ」が分かる内容が含まれていると生徒が興味をもつ、といったものである。内容面については、説明が難しいので省略するが、一つだけあげれば「体と心の発達に対して。こうだったよ、という経験を話すことを盛り込むと、より発展した授業となる」といった指導を受けている。

「大きな声での指導」については、事前指導での動画および目の前での模擬授業でも気になっていた部分であり、事前指導をより丁寧にやるべきであったと思われる。

研究授業は、最終日前日の2時間目に担当クラスである1年7組に対して「子どもとともに育つ」の4時間目の授業である「子どもの育つ環境」を行った。本人は次のように反省をしている。

- ・グループワークの発表の時、生徒が話してくれたことの中で、もう少し要点だけ言わせればよかった。
- ・途中で自分自身に焦りが出てきて、結果として時間が余ってしまい、良い終わらせ方（まとめ方）ができなかった。結論のところがぼやけてしまった気がする。
- ・次につなげる発展させる授業を考えることは本当に難しい。1時間の授業の中でも小節ごとに区切るのではなく、必ずつなげる作業を行う、そういう部分が抜けていた。
- ・HRクラスだったので、生徒の方が一生懸命、私自身を助けようとたくさん発言してもらった。生徒に助けられて成立した授業だったと思

表2 Sの教育実習の概要

日にち	学校行事	実習の内容
5月8日		オリエンテーション（4時間）・観察実習（1時間 家庭）
5月9日		観察実習（2時間 家庭・国語）・授業実習（1時間 調理）
5月10日		観察実習（1時間 LHR）・授業実習（4時間 調理1 保育3）
5月11日		観察実習（2時間 生物・情報）・授業実習（2時間 保育2）
5月12日		観察実習（1時間 国語）・授業実習（2時間 保育2）
5月13日	休日	
5月14日	休日	
5月15日	開校記念日	
5月16日		観察実習（1時間 生物）・授業実習（2時間 調理 保育）
5月17日		観察実習（2時間 数学・LHR）・授業実習（4時間 保育3 調理）
5月18日		授業実習（1時間 保育）・研究授業（保育）
5月19日		観察実習（2時間 国語・日本史）・授業実習（2時間 保育2）
総計		オリ4時間・観察11時間・授業実習18時間（研究授業を含む）

う。

これに対して、参観してくださった指導教諭らは、次のような指摘をされていたようである。まず、良い点である。

- ・声はよくでていた。
- ・授業を見るたびに声も大きくなり、板書もよく見えていた。
- ・自分が親になったときまで、関心を広げることができたように思う。

研究授業を参観した大学の I 先生も「しっかりと落ち着いて授業をされていた。」と述べており、さらに「グループワークなど、生徒が授業に参加できる、興味深い授業であった」とお話しされた⁴⁾。

一方で、以下のような課題も示された模様である。

- ・生徒の発表は、大事なところだけをかいつまんで、最後にまとめて、こんなところが良かったという形が望ましいのでないか。
- ・話の内容が分断されてしまっている。次の時間につなげられるように、話を肉付けする終わりが望ましい。
- ・自分の経験も織り混ぜながら、生徒になるほどと考えさせ、このクラスではこうすると、それぞれのクラスの様子で授業のやり方を変えてもよい。
- ・発表の時に、聞いてはいるがボーとしている生徒がいた。その間に何かできないか。大きな紙を貼りだす実物投影機を使うなど、まだまだ色々な工夫ができそうな授業だった。
- ・グループワークの発表中、手が空いてしまうので、メモができる何かが別にあればよかった。
- ・板書の時に、書いて－見て－言って…、の「見て」の時に生徒に視線を向ける工夫がほしい。
- ・発表に順位づけがあれば、総評がしやすくなったのではと思った。
- ・遊びに関してなので、今でも遊ぶものとして、逆にたどることもできたらよかった。大人の遊びにも共通するものがあると、さらにイメージがしやすい。
- ・さらなるステップアップとして、どう個性をだしていくかが、今後の課題である。
- ・導入で、砂遊びを心の発達に分けてしまったが、

体（指先を使い）の発達も含まれるのではないか。

研究授業の翌日、教育実習は終了した。保育領域の家庭科の授業を二度行い、さらに国語と日本史の観察実習を行っている。S は教育実習日誌に次のような反省を記している。

今日で最後の実習でした。有終の美とはいかず、後悔ばかりが浮かんできます。「もっとこうできたのに、もっとこんなふうにな上手にできたら、考えられたら」、そう思うことばかりです。また、器用にできない自分自身も悔しい気持ちでいっぱいです。この悔しさをバネに、どうしてもあきらめることができなかった教員という仕事にたどり着けるよう、またここからスタートで精進していきたいです。

指導教諭のお二人の先生は、次のようなコメントを記している。

(HR 指導教諭)

2 週間の教育実習、本当にお疲れ様でした。ただでさえ短い日程であるのに、開校記念日や進路探求セミナーなどのために生徒と触れ合う時間が減ってしまい、残念であったかな、と思います。そのような事情もあり、HR には 2 日目から入っていただき、初めはいきなりで慣れないことにお悩みの様子でしたが、最後には連絡事項を正確に伝える姿に安心しました。今回の実習の経験を生かしてご活躍されることを願っております。

(教科指導教諭)

あつという間の 2 週間でしたが、S 先生には早期からの授業デビューで大変だった事と思いますが、なかなか大きな声を出しにくい S 先生にはこれで良かったかな、と思います。家庭科は、内容の半分が実習で、という目標があります。広い実習室ではきちんと指示しなければ何の事故がおこるかわかりません。数をこなしていくと、そのあたりもわかるようになります。今後の活躍を期待しております。お疲れ様でした。

(3) 事後指導

さらに S は、実習終了の翌日（5 月 20 日）に次のようなメールを筆者に送ってきた。

4) 2017 年 5 月 25 日に I 先生より、筆者が聞き取りした。

昨日で無事教育実習が終わりました。日誌も昨日のうちに何とか書き終え、提出してきました。

あとは、戻ってすぐにお礼状を書くことですね。お礼状のことは、実習の何かに書いてあります。ちょっと見当たらなかったのを確認したいのですが、「校長・副校長・教頭・教科指導教諭（教科主任）・学級指導教諭・教務部長・担当学級の生徒皆さん」に送付で良いのでしょうか。確か1週間以内に送付で良いのですよね。

それから、教育実習の成績評価のところを見ると教育実習Ⅰでテーマを決めた「教育実習課題レポート」で30%を評価すると書いてあったのですが、私自身今回の実習に向けて書いていないのですが、大丈夫なのでしょうか。

研究授業は、お忙しい中、I先生にもお越しいただいて、藤卒業のM先生も見に来て下さいました。他、校長先生や教務部長の先生なども見に来てくださり、良かったよという声をたくさん頂戴し、本当にホッとしました。これも先生が1年以上に渡って指導して下さったおかげです。本当にありがとうございました。

戻ってから、今度は免許の更新講習を受ける手続きが待っています。まだ道のりは長そうですが、何とか頑張っていきたいと思います。本当にありがとうございました。

事後の「お礼状の作成」と「実習課題レポートの作成」についての質問が含まれている。

筆者はまず、お礼状について以下のようなメールをした。その後Sは3通のお礼状を送った模様である。

さて、お礼状のことですが、渡した資料には同封されていなかったようですね。送るのは、①校長、②教科指導教諭（教科主任）、③学級指導教諭（→この中に、「担当学級の生徒の皆さん」の手紙を入れる）の3通です。すべて学校宛に、封筒を別にして出します。

①は実質的には学校宛と考えて下さい。②と③に書いたことをまとめて記し、最後にたとえば「実習中にお世話になった教育実習担当の〇〇先生（→教頭の場合もあるし、総務など、その担当の方がいる場合もある）にもよろしくお伝え下さい」などと書きます。

②は、まさに授業のことなどを中心に実習中に考えたことを記します。また③は、SHRやクラスの生徒との関係を含めて記します。③に「〇年〇組のみなさんへ」といった手紙を同封してもよい

です。まず②③を書いて、そのあとでまとめた形で①を書くといいたのではないのでしょうか。それ以外に、あなたの場合、今回実習内諾でお世話になった、高校時代の恩師の先生などにも書いてもよいです。

また「実習課題レポート」については、29日にSに次のようなメールを送った。

「教育実習Ⅲ」の成績は、実習課題レポートと実習校の評価表、そして教育実習そのものの三者でやりますが、レポートは書いてもらいます。9月末までに、プリントアウトした形で（必要であれば資料もあるので）私あてに送って下さい。字数は2000字程度（資料などは含まず）で、タイトルは実習で学んだこと一つについて、焦点をあてて記して下さい。

なおここでいう「資料」とは指導案や副教材のことで、手書きのものも含まれる可能性があるもので、添付ファイルではなくプリントアウトしたものを郵送してほしい、とお願いしたのである。最終的にSからは、9月末までに郵送にてレポートが到着した。タイトルは「保育単位における実践的・体験的な学習の意義と課題」であった。また上記にある「実習校の評価表」は6月には実習校より日誌とともに届き、成績は5段階で、学習指導・生活指導・実習態度の総計6項目で、SもしくはAであった。所見には「何事にもじっくりと時間をかけて取り組む真摯な姿勢が見られた。自分自身の性格を分析し、不得手なところを克服しようとしている様子が見られたので、今後の活躍にも期待できると思われる」と記されていた。

4. おわりに

以上、遠距離にいる実習生に対して教育実習の事前事後指導をどのように行ったかを報告した。具体的なSへの指導は、メールのやりとりが51件、指導案の添削が6件、録画送付にコメントを行ったものが5件、目の前での模擬授業指導が1件であった。またそれ以外に教務課との事務的なやりとりなどを郵送によって行った。以下、事前事後指導に分けて、まとめと課題を記す。

まず事前指導についてである。事前指導の内容は、大きく分けて二つある。一つは実務的な内容であり、もう一つは実践的な内容である。前者については、現役学生に行う「教育実習Ⅰa・b」で配布するプリント

などがある程度郵送した。例えば「教育実習の流れ」「実習日誌の書き方」「お礼状の書き方」などである。それに関連してメールでも説明を付け加えた。卒業しても中学校免許を取得したいと考えているまじめな人柄であり、筆者も学生自体の S を知っていたので、この点については大丈夫であろうと楽観視していた。しかし、実際には、本論で見たように、細かい質問が多く寄せられた。もちろん郵送ではなく、メールでのやりとりであるからこそ、このような細かい質問もするのであるが、やはり「プリントに書いてあるのだが…」と歯がゆく思ったこともあった。

二つ目の実践的な内容については、目の前で模擬授業をやってもらうことは遠距離にいるため不可能であるとしても、インターネットなどで動画を送ってもらい、これについて筆者がみてコメントを送るという形で、なんとかすると筆者は考えていた。

曲がりなりにも、ICT の活用といった感じである。本論にあるように、最初の指導案からある程度のレベルには達したり、形式的な指導案の書き方がわからずに指導教諭に注意される事態にはならないであろうと予想できた。実際の教育実習でそうだった模様である。筆者自身としても、指導案および模擬授業をしっかりと見て、丁寧なコメントを送ったつもりではある。それについて、教育実習を終えて 10 ヶ月、単位を修得後の 2018 年 3 月の時点で、S 自身がどのように評価したかを以下に掲げる。

大学を卒業して 10 年以上経ってしまっているので、ネットや本などで調べたり参考にしたりしても、本当にこの書き方で良いのだろうかとか疑問に思うことが多く、一からの学習だった。振り返ると、O 先生に見ていただくビデオは、スカイプなどで、リアルタイムで見てもらうほうが良かったと思う。ビデオを送って、返事をもらってだと、どうしても自分の行動を忘れてしまっていて、なんでこんな内容にしたのだろうかという疑問ばかりが残ってしまった。また、教科に関する指導がもう少しあるとよかった。時間があれば、教科に関して、もう一人くらい先生に見てもらえたらより良い実習につながるように感じた。

また、大学での他の生徒の模擬授業が見られる機会を設ける、可能であれば、実習前の講義に毎回は無理だが、ここは参加しておくべきという講義だけでも、現役大学生と一緒に受けることができたら良かったと思う。

ここには、メールでのやりとりやインターネットで

の模擬授業といった ICT の活用について、やや否定的な言辞が多い（筆者がそれを要望したことも関係あろう）。模擬授業について「リアルタイムで見てもらう方が良かった」といった点である。自分の実践が過去のことになってしまっていて、振り返りが十分にできなかったというのである。また、指導する内容についても、筆者が教育学を専攻しており、教育方法については指導できても、家庭科という内容については十分でないとして「教科に関する指導がもう少しあるとよかった」としている。

さらに、やはり個人的な指導についての疑義も出されている。「実習前の講義に毎回は無理だが、ここは参加しておくべきという講義だけでも、現役大学生と一緒に受けることができたなら良かった」というのである。

以上の指摘から、実務的な指導はともかく、実際の指導については、ICT を活用するといっても、直接会って指導をする大事さが明らかになった。それでも遠距離での指導が必要な場合には、リアルタイムでの指導や、より専門性の高い「仲間」との学習を少しでも取り入れることが大事なのである。

続いて、事後指導についてである。事前指導でも述べた実務的な指導について、やはり十分とは言えない面もみえた。たとえば、「お礼状の書き方」や「実習課題レポートの書き方」、そして今回の教育実習に関する成績について、実習が終わった後に質問が出てきている。実習課題レポートの書き方について、通常の授業では 90 分の時間を使って、テーマ設定の方法や過去の例を示して説明をしている。S の場合には、以前に一度書いたこともあり、丁寧な指導をしなかったため、今回のような事態がおきた。また、通常の授業では、教育実習が修了後、「実習を終えて」という報告を書かせて、みんなの前で発表させている。振り返りの意味とその後に実習に行く学生に情報を与えるためである。しかし、S には発表させる機会がないため、報告はさせなかった。

以上、いくつかの問題点を中心にまとめたが、筆者としては、なんとか実習が耐えられるような事前指導であったとは評価している。また事後指導についても、今後教員になろうと考えている S にとって、レポートを書くことには意味があったと思われる。S は、今後、この経験をどう生かすかについて、以下のように記している。

実習に行くことができて、先ほども述べたが、感謝の気持ちでいっぱいである。高校も大学も快く受け入れてくださり、家族にも支えられて、高

校も大学の先生も支えてくださった。一つとして欠けていたら実習を受けることはできなかったであろう。

やっぱり目指そうかなと思いはじめてから、高校の恩師に会うことができ、O先生とのやりとりからも、様々な指導の可能性を私自身も体験できた。研究授業を今年度退職なさるI先生に見ていただけたのも驚きのタイミングだったと思う。あと一年遅ければ、子どもも小学生なので、諦めていたような気がする。タイミングと周囲の人たちの協力の賜物だったと思う。

今後については、もちろん教員を目指す。ただ、講師でも良いとは思っている。この3年間、教員免許取得のために時間を使ってきた。年齢的なこともあるので、教員には早くに就けたら良いとは考えてはいるが、正直なところできたらもう一人家族を増やしたい。京都府の教員採用試験が45歳未満まで受験資格があるので、それまでにはなんとか教壇に立っていることができれば良いなと思っている。何より春から小学生の我が子が、私が教員になることを楽しみにしてくれているので、実現できるよう頑張りたい。

曲がりなりにも単位が取得できて、今後の希望がみ

えた実習ではなかったと思われる。事前事後指導とともに、この実践報告についても色々と協力いただいたSに対してお礼を述べたい。そして、今後の発展を祈念したいと思う。

引用・参考文献

- 1) 浦野弘他「事前・事後指導を含めた教育実習プログラムの標準モデルの研究開発」『東京学芸大学紀要』第1部門，教育科学，第38号，1～23頁，1987年。
- 2) 三浦朋子「教育実習事前・事後指導のあり方に関する一考察：実習前後における学生の認識変化分析を通じて」『亜細亜大学課程教育研究紀要』第3号，1～14頁，2015年。
- 3) 山岸知幸他「教育実習事前事後指導の指導」『香川大学教育実践総合研究』第32号，101～109頁，2016年。
- 4) 教育職員免許法の一部を改正する法律（平成元年法律89号），1989年。
- 5) 文部省，開隆堂，2000年。
- 6) 国立教育政策研究所教育課程研究センター編，2012年。
- 7) 『教育実習日誌』第3版第5刷，学術図書出版，2016年。
- 8) 『教育実習の手引き』第6版第6刷，学術図書出版，2016年。

A case of pre/post guidance for a student enrolling teaching practicum in a remote location

Kazuto OYA

(Department of Arts and Science, Faculty of Humanities, Fuji Women's University)